

はじめに

一九九〇年、私は大学を卒業し、非常勤講師として、とある高校の教壇に立った。

若く、未熟だった私の授業は、たちまち学級崩壊に陥った。それでも、私が古風な文学青年であったためだろう、何人か、自作の詩や小説を見せにくる生徒もあらわれた。

それらの作品には、ほんきで感激させられるものもあれば、習作としても出来ないものもあった。ただ、どの生徒が書くものも、「芸術作品」——小説の場合なら「純文学」——であろうとしている点は、おなじであった^{〔注1〕}。

それから十年以上、私はその高校に厄介をかけた。人まえて話しをすることには、すこしは馴れていったものの、その高校での私は最後まで、

「授業のへたな、文学青年くずれ」

であった。大半の生徒からはそっぽをむかれ、ごくわずかな生徒だけが、書いた作品をもって私に寄ってき

た。

生徒の書くものに変化が見えるようになったのは、教壇に立つようになって五、六年してからだろうか。「純文学」風の小説を目にすることが、ほとんどなくなったのである。生徒が「小説」と称して書いてくるのは、アニメやゲームの二次創作ものか、自作のイラストが挿入されたライトノベル調のものばかりになった。

おもえば、私がその高校でおしえはじめた頃、読書好きな生徒は、よしもとぼなや村上龍を読んでいた。ところが、九〇年代後半になると、同時代の「純文学作家」を読んでいる生徒は、目立って減りはじめた。

インプットとアウトプットの双方にわたって、私がかかわる生徒たちは、「純文学小説」から離れていったわけである。当初、私はこの現象を、その高校の生徒の質がおちたせいだとかんがえていた。が、この認識のあやまりに気づくのに、時間はかからなかった。しばらくして、私は大学や予備校でも仕事をはじめた。それらのあたらしい職場でも、自作の「小説」だといって見せられるのは、おおむね、「純文学」とはかけ離れた作品であった。

興味ぶかいのは、教え子が見せにくる「詩」には、こうした変化が見られなかったことである。いかにも「現代詩」といったおもむきの作品を、授業後にしめされることは、現在でもめずらしいことではない。

この『『文芸全般』ではなく、『純文学』の小説ととりわけ縁どおくなる』という傾向は、どうやら私の教え子にだけ生じたのではないらしい。昨年(二〇一〇年)、村上春樹は、インタビュに答えてつぎのようにいっている。

それまで(引用者注・『ノルウェイの森』がミリオン・セラーになるまで、という意味)は、一部の熱心な読者がいる、
いかなればカルト的作家みたいな気楽な立場だった。でも結局『ノルウェイの森』が売れすぎたんだと思

う。僕はそういうことはあまり気にしないほうだけれど、それでも、いわれない反感みたいなものを感
じるところがあって、孤立感は強かったです。日本文学自体が変質して、メインストリームのものが実
質的な力を失って引いていくなかで、あくまで結果的にですが、僕がオフサイド的に目立つことになっ
てしまった。^[注2]

「日本文学自体が変質して、メインストリームのものが実質的な力を失って引いていく」——「純文学」と、
それをささえていた「文壇」というシステムの崩壊を、肌で感じた、ということだろう。

『ノルウェイの森』がベストセラーとなったのは一九八七年、バブル経済の絶頂期であった。「純文学」や「文
壇」は、「遅れて近代化した国」として、先進国に追いつこうとした時期の社会システムに対応している。そ
れらはたしかに、バブルの到来——キャッチアップ型発展モデルの飽和点——で使命を終えた^[注3]。しかし、
バブル時代の経済的ゆとりは、すでに不用となった「これまでのメインストリーム」が、居残りつづけること
を許容した。彼ら「旧・主流派」は、影響力をうしないかけていたとはいえ、ポスト「純文学」の時代のシン
ボルである春樹に、嫌がらせをするぐらいの余力はあった。『ノルウェイの森』の後、春樹が圧迫を受けたの
はこのためである。

バブルの崩壊を、社会全体が実感したのが一九九二年である。それによってもたらされたのが、一時的な不
況ではなく、日本社会の構造的な行きづまりであることは、一九九五年に表面化した^[注4]。これ以降、春樹を
抑えこもうとしていた「旧・主流派」は、一般の読書好きからほとんど意識されないほど、小さな存在になった。
地域を問わず、歴史のはじめには、韻文が「高級な文学」のにない手であった。近代社会の成立とともに、
詩が占めていた「文学の王者」の座を、芸術としての散文フィクションが奪いとる。こうしておとされた「純

文学小説の時代」の、日本における終焉が、一九九五年だったのである。

これまでに、「純文学変質論」のたぐいは、くりかえし論議されてきた。しかし、文学で生活している人間、あるいは、そうなることをのぞんでいる人間が、

「文学者としてもっとも高級な」となみは、芸術としての散文フィクションを書くことだ」

という信念を共有している——この事実はずっと変わらなかった。しかし、現在の「書きたい若者」の多くは、「純文学小説」に特別なこだわりをもっていない。

一九九五年の日本でおこった「純文学」の終焉は、二〇世紀初頭に、クラシック音楽が直面した事態になぞらえるとわかりやすい。第一次大戦以前のクラシックの演奏会では、過去の古典とおなじようにして、同時代の作品がとりあげられていた。両大戦間を端境期として、現存作曲家の音楽は、一部の好事家だけが聴くものになった。今日でも、ベートーヴェンやモーツァルトはさかんに聴かれているが、彼らに匹敵するほどポピュラーな同時代作家は、クラシック音楽の分野にはいない^{〔注5〕}。

漱石や太宰は、ベートーヴェンやモーツァルトのように、これからもひろく享受されるだろう。いっぽう、今後生み出される「純文学小説」は、「現代音楽」がそうであるように、かぎられたマニアだけに愛好されるにちがいない。

本書は、二〇一〇年九月におこなわれた、ひつじ書房設立二〇周年記念シンポジウム「可能性としての文学教育」を母胎としている。

文学教育は、しばしば「感動」や「心のゆたかさ」を謳う。だが、何が「文学」であり、いかにして「感動」がおこるのかをあいまいにしたまま、それをいうことはあまりにあやうい。教える側が熱意をもてばもつほど、教えられる側は、押しつけをこうむったと受けとりかねない。ことに、一九九五年以前に文学観を形成した人

間が教える側にあるとき、その危険はつよくなる。

シンポジウムでは、ナイーヴな「感動主義」とは距離をとりながら、文学教育を実践する方法が模索された。山本康治氏は、文学教育において「感動」が特権的な地位をしめていく歴史的経緯を、明治期までさかのぼってしめされた。同時に、「感動」のみをよりどころとしない、文学教育の意義と使命について、具体的な提案をしてくださった。

「純文学小説」の時代のおわりは、右肩あがりの経済発展が見こめた時代のおわりでもある。物質的にゆたかになることを追求しても、大半の国民がむくわれぬ状況がやってきている。文学教育においては、「実利」にのみ還元されない「幸福」が問題とされる、という山本氏の結論は、今日においてこそおもしろい。

言葉をもちいる文学以上に、音楽や美術は、感性のみで受けとるべきものとみなされやすい。むしろ、音楽や美術にも、作品解釈の「方法」は確固としてあるのだが、それらは現況ではなおざりにされている。岩河智子氏は、自在にピアノをややつりつつ、音楽上の「印象」がいかに立ちあがるかを解説してくださった。氏は、札幌室内歌劇場の音楽監督をつとめておられる。楽曲分析という知的作業を、ここまで観客をひきつけつつ展開できるのは、氏が舞台人だからだろう。論理を介在させて対象にわけけることと、対象の「生氣」をおもひこめることは矛盾しない——そのことを、岩河氏の講演は実感させてくれた。

相沢毅彦氏は、日本文学協会・国語教育部会の若手の論客である。文学テキストが何を意味するのか、唯一の正解はなかなかみつからないことは、だれが見てもあきらみかた。かといって、生徒ひとりひとりが、好き勝手にテキストを解釈するにまかせると、文学教育はなりたたない。この袋小路に対し、最新の文学理論を武器に、相沢氏は正面突破をはかった。氏の奮闘は、袋小路を解消させるよりも、その前で誠実に迷いぬくほうに意味がある、という事実を、われわれにしめしてくれた。

なお、私は系統立てて国語教育を研究してきたわけではない。こうした論集の編者をつとめるには、キャリアも力量も不足している。相沢氏には、もうひとりの編者となっていたら、編集作業をすすめるうえで、支援をうけた。

シンポジウムで講演していただいた以上三氏のほかに、論集をなすにあたり、あらたに三名の方に寄稿をおねがひした。

黒木朋興氏には、フランスにおけるレトリック教育の歴史についてお書きいただいた。レトリック（修辭学）では、書くべき主題の発見法や、演説の際の身ぶり・手ぶりまでもが研究対象となる。小説が文学の中心を占める以前、欧州では、そうしたレトリックこそが、言語教育の根幹であった。それが、小説の時代の到来とともに、書きことばの表現効果だけが、教育の場で偏重されるようになった。

欧米でも、文学における小説の覇権はおわりつつある。そうした状況のもと、言語教育のありかたを問いたい。おすのに、黒木氏の論文は必読といえる。

水野僚子氏には、岩河氏の報告をおぎなう意味で、美術教育におけるリテラシーの問題を論じていただいた。現在の美術教育では、画像読解の方法や、視覚表現がいかなる効果をもたらすかについて、問われる機会がほとんどない。このため、「見ること」をつうじてのイデオロギーのすりこみに、現代日本人はまったく免疫ができていない。

理論を看過し、感性のみでおこなわれる芸術教育の弊を、水野氏はあざやかにめぐり出されている。こうした指摘が、文学教育にとっても、他人事でないのはいうまでもない。

さきにふれたように、テキストの読みの多様性をみとめることと、文学教育において実をあげることの、両立はむずかしい。

高木信氏は、一義的な解釈を批判するテキスト論の立場から、文学教育について発言してこられた。本書にお寄せくださった論のなかで、高木氏は、「テキスト理論的分析」という概念を提唱している。それは、読み手の解釈のほしきままな暴走を賛美するものではない。テキストから聞きとれるさまざまな「語る声」に耳をかたむけ、通りのいい解釈に安易にもたれかかろうことを氏はしりぞける。長年、国語教育の側からテキスト論に提示されてきた疑念に、決定的にこたえたものと、私は高木氏の論考を読んだ。

シンポジウムに足を運んでくださった聴衆は、そろって深い問題意識をおもちであった。それらの方々との対話から、触発される場所は多かった。なかでも、理化学研究所の竹谷篤氏からの、

「アメリカの学生とくらべ、日本の学生は、理数能力ではおとらないのに、プレゼン能力で負けている。これは、国語教育の問題ではないのか」

という問いかけには刺激をうけた。そこで、理系の研究者の立場から、国語教育にかんじている疑問点を竹谷氏にまとめていただき、それに対する相沢氏と私の応答とあわせて、本書に掲載することにした。

なお、シンポジウムの後、本書が編まれるまでに、東日本大震災と福島第一原発の事故という、大きな出来事があった。それらをつうじて、これまで見えていなかった日本社会の問題が浮きぼりになった。これに対し、文学教育はどこまで応じられるのか——私自身は、この問いについて論じた文章をまとめてみた。

シンポジウムをもとに書籍をつくることは、ひつじ書房房主・松本功氏の発案による。類書にはない、ユニークな価値がこの書にあるとすれば、松本氏の提言による部分が大きい。また、担当編集者の森脇尊志氏をはじめ、ひつじ書房のスタッフの方々には、私の至らなさからさまざまな負担をおかけした。あらためてお礼と、おわびを申しあげたい。

震災と原発事故は、「純文学小説の時代」のおわり、太平洋戦争後の社会システムの失効を、あらためて告

知するものであった。あらゆる「もと」や「こと」の存在意義を問いなおされている今、文学教育はいかにして生きのびられるのか——その問いかけに、いささかなりとも本書が答え得ているとすれば、編者として幸いにおもう。

助川幸逸郎

〔注1〕「純文学」の定義はむずかしい。実際的には、その作品が掲載されたメディアによって、「純文学」か「大衆文学」かが区別されることも多い。ここでは、「芸術」としてあつかわれることをめざしている文学」という意味で、「純文学」の語をもちいることとする。ちなみに、「純文学」とか「大衆文学」とかという言いまわしは、事実上、小説に対してしか適用されない。このことは、近代における、小説の特権的な地位のあらわれである。

〔注2〕「村上春樹 ロングインタビュー」(季刊『考える人』二〇一〇年夏号 新潮社)

〔注3〕このことは、柄谷行人『近代文学の終り』(二〇〇五年インスクリプト)でも指摘されている。柄谷は、春樹を批判する勢力の理論的支柱であった。立場の相反する柄谷と春樹が、おなじ認識をしめしている事実はおもい。

〔注4〕九五年は、オウム事件と阪神大震災が起こった年である。この年を、日本社会の転換点としてとらえる論は多い。経

済的にいえば、九五年は、燃料コストの上昇があらゆる合理化の限界を超えた年である。先進国において、製造業で富を得ることが不可能になり、アメリカが決定的に金融化に踏み出したのが九五年なのである。このことは、第一次世界大戦以来の経済システムの崩壊を意味する。『超マクロ展望 世界経済の真実』(水野和夫・萱野稔人 集英社 二〇一〇) 参照。

〔注5〕一般的に「クラシック音楽」として享受されている作品は、バッハやヘンデルのような例外をのぞけば、フランス革命以降、第一次世界大戦までに生み出されている。「クラシック音楽」は、一部の例外のぞけば、「一九世紀の申し子」なのである。

可能性としてのリテラシー教育 目次

はじめに 助川幸逸郎…………… iii

明治期国語教育の展開
——文学教育はどのように生まれたのか—— 山本康治…………… 1

楽しい音楽分析（アナリゼ）
——イメージを広げる楽譜の読み方—— 岩河智子…………… 25

文学教育の実践における読みの理論の必要性あるいは困難さについて
——文学教育の可能性を切りひらく試みとして—— 相沢毅彦…………… 41

サバイバルのための文学教育
——情報リテラシーの養成と文学教育—— 助川幸逸郎…………… 71

理系研究者から見た文学教育の問題点

——竹谷篤氏からの提言と、文学研究者からの応答—— 竹谷 篤・助川幸逸郎・相沢毅彦…………… 97

美術教育とリテラシー 水野僚子…………… 127

林京子「空罐」のへ亡霊的時空、あるいは記憶の感染の（不）可能性

——教室のなかのテクスト論・2—— 高木 信…………… 155

黄昏の文学教育、レトリック教育の可能性／テクスト論を越えて 黒木朋興…………… 189

あとがき 相沢毅彦…………… 217